２０２３年１２月１７日　礼拝説教要旨
ハイデルベルク信仰問答講解Ⅱ「契約のしるし」
イザヤ４４：１～３、使徒言行録２：３７～４２

問７２それでは、外的な水の洗いは、罪の洗い清めそのものなのですか。
答　いいえ。ただイエス・キリストの血と聖霊のみが、わたしたちをすべての罪から清めてくださるのです。
問７３それではなぜ、聖霊は洗礼を「新たに造りかえる洗い」とか「罪の洗い清め」と呼んでおられるのですか。
答　神は何の理由もなくそう語っておられるのではありません。すなわち、ちょうど体の汚れが水によって除き去られるように、わたしたちの罪がキリストの血と霊とによって除き去られるということを、この方はわたしたちに教えようとしておられるのです。それば かりか、わたしたちが現実の水で洗われるように、わたしたちの罪から霊的に洗われることもまた現実であるということを、神はこの神聖な保証としるしとを通して、わたしたちに確信させようとしておられるのです。

信仰問答は、洗礼の水そのものに罪を洗い清める力があるという考え方を退けています。洗礼の水や聖餐のパンや杯を神聖なものとして崇めてしまう誘惑があるからです。洗礼の水はイエスさまの十字架で流された血と聖霊によって罪から洗い清められることを指し示すしるしに他なりません。洗礼の水を見ることで、わたしたちはイエスさまによって罪が洗い清められたことを思い起こし、確信するのです。ここで言う「思い起こす」とは、ただ頭の中で思い出すことではなく、それを追体験すること。洗礼を通して、イエスさまの救いの出来事が時を超えて現在化します。

問７３にある「現実」という言葉に注目しましょう。わたしたちは毎日の生活の中で水を使って体を洗ったり、物を洗ったりします。そのことをわたしたちは知識として知っているというよりも体験的に知っているのです。誰から教えられるわけでもなく、水で洗うと汚れが落ちるという経験を日々積み重ねることによって、そのことを体験しています。ですから洗礼の水を見た時に、わたしたちはイエスさまによって罪が洗い清められていることを現実のこととして受け止めることができるのです。そのことが極めて重要です。

信仰は、ただ頭の中のこと、机上の空論ではなく、それはわたしたちの生き方、生活に直接結びつくものです。問７０では、洗礼によってわたしたちはキリストの体の一部分とされ、「次第次第に罪に死に、いっそう敬虔で潔白な生涯を歩む」とありました。信仰はそのような敬虔で潔白という新しい生き方、生活をそこにもたらすのです。このことはわたしたちが真に求めていることでしょう。けれどもそうなれないからわたしたちは苦しむのです。人の思惑、利害が絡むことによって、わたしたちはこの敬虔さを失います。潔白でなくなるのです。人はもっとよく生きることができるはずです。神さまは人間を良いものとしてお造りになられました。しかし罪によって人間の本質は汚されてしまいました。それゆえに神さまは、イエスさまの十字架とよみがえりによって罪を洗い清め、それを洗礼という手段を用いてわたしたちに現実のものとしてくださったのです。そこでこそ、信仰は机上の空論ではなく、現実の生活となって現れてくるでしょう。そしてこの新しい生き方がこの後の小児洗礼を成り立たせる一つの根拠にもなります。

問７４幼児にも洗礼を授けるべきですか。

答　そうです。なぜなら、彼らも大人と同様に神の契約とその民に属しており、キリストの血による罪の贖いと信仰を生み出される聖霊とが、大人に劣らず彼らにも確約されているからです。それゆえ、彼らもまた、契約のしるしとしての洗礼を通してキリスト教会に接ぎ木され、未信者の子どもたちとは区別されるべきです。そのことは旧約においては割礼を通してなされましたが、新約では洗礼がそれに代わって制定されているのです。

教会は伝統的に幼児に洗礼を授けてきました。しかし宗教改革の時代にそれを認めない考え方が生まれました。いわゆる「再洗礼派」（アナバプテスト）と言われるものです。ここからバプテスト、メノナイト、クエーカーなどの教派が生まれます。この主張は、洗礼とは個々人の自覚的信仰に基づく神さまとの契約であるというものです。そういう教会では洗礼の時に、例えば受洗者は自分が作成した信仰告白を読み上げることがあります。それは信仰的に自立した印象を受けます。

一方で小児洗礼を認める教会があります。カトリックも聖公会もルター派もわたしたちの改革派の教会もそうですが、そこでは洗礼が個人の自覚的信仰に基づくのではなく、教会という共同体の信仰を契約の土台として捉えます。「未信者の子どもたちとは区別されるべきです」というのは、そういうことです。それゆえ赤ちゃんなら誰でもいいのではなく、教会につながっている信仰者の子どもであることが前提です。信仰問答で取り上げられています旧約聖書の「割礼」も小児洗礼の根拠でありますが、これもイスラエルという信仰の共同体を契約の前提にしています。神さまがアブラハムを祝福し、神の民とされるのは、アブラハム個人ではなく、やがてアブラハムを祝福の基とするイスラエルという共同体全体に及びました。そこに生まれた子どもにはそのしるしとして「割礼」が施されたのです。わたしたちは小児洗礼をそのように理解しています。信仰の共同体の中に生まれた子どももまた契約の子どもであって、そこから外れてはいない。教会はそこに神さまの恵みの選びを見ました。自立した成熟した信仰が伴えばそれに越したことはありません。しかしわたしたちは強くありませんし、様々な欠けや弱さを抱えています。信仰の共同体の中で守られ、育まれることを求めています。

そういう意味で、罪を赦され、洗い清められた者たちのリアルな信仰生活がどうしても必要です。そのキリスト者の敬虔の中で子どもたちも学び成長していくでしょう。わたしたちは突如として神さまを信じたわけではありません。信仰のモデルである親や教師、友人との出会いの中で、その信仰の生き様を見て育てられました。子どもたちはそういう信仰の共同体、その交わりの中でその生き方を学び取るのです。それは模範的な存在を求めていません。その欠けや弱さも含めて、子どもはそこから恵みを感じとるでしょう。信仰者の親も我が子が洗礼を授けられるときに思い起こすのです。自分もまた何も知らない、子どものような存在だった。今もそうだ。神さまは恵みによってこの自分を救ってくださったと。その恵みの契約を現すしるしとして教会は子どもに洗礼を授けてきました。

天の父よ。あなたはイエスさまの十字架とよみがえりの御業によって、わたしたちの罪を洗い清めてくださるために洗礼という手段を備えてくださいました。そしてこの恵みに生きる群れ、共同体をここに備えてくださいます。この教会の中でわたしたちは守られ、成長していきます。どうぞどこまでもこの恵みの中に置いてください。主の御名によって祈ります。アーメン。